

スポーツ国際開発学共同専攻（修士課程）

Joint Master's Program in International Development and Peace through Sport

- 修士（スポーツ国際開発学）
- Master of Arts in International Development and Peace through Sport

人材養成目的 / Program Educational Objectives

スポーツ・体育・健康に関する理論的・実践的な知識を英語によって学び、国際平和と友好、豊かな地域社会の創造に寄与し、指導的役割を担うことのできる高度専門職業人・研究者を養成する。

養成する人材像	<p>筑波大学大学院学則および鹿屋体育大学学則に規定する課程の目的を充足した上で、次の能力などを有することが最終試験において認定された者に修士(スポーツ国際開発学)の学位を授与する。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感 2. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ 3. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力 4. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力
修了後の進路	<p>国際機関、国内外のスポーツ関連組織、国内外の開発支援組織、大学等の教育研究機関等、国内外 NGO、NPO 機関、国内外グローバル企業等</p>

学位授与の方針 / Diploma Policy

筑波大学大学院学則及び関係規則に規定する修士課程の修了の要件を充足したうえで、次の知識・能力を有すると認められた者に、修士（スポーツ国際開発学）の学位を授与する。

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	1. 知の活用力：高度な知識を社会に役立てる能力	①研究等を通じて知を社会に役立てた（または役立てようとしている）か ②幅広い知識に基づいて、専門分野以外にも問題を発見することができるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、スポーツ・文化・社会、上級コーチ教育論、プロジェクトマネジメント論、研究方法論、社会開発のための公共政策、課題研究、中間発表会、修士論文作成、最終試験、学会発表など
	2. マネジメント能力：広い視野に立ち課題に的確に対応する能力	①大きな課題に対して計画的に対応することができるか ②複数の視点から問題を捉え、解決する能力はあるか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ・文化・社会、プロジェクトマネジメント論、NGO 等プロジェクト、各種 OJP 科目、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	3. コミュニケーション能力：専門知識を的確に分かり易く伝える能力	①研究等を円滑に実施するために必要なコミュニケーションを十分に行うことができるか ②研究内容や専門知識について、その分野だけでなく異分野の人にも的確かつわかりやすく説明することができるか	各種 OJP 科目、中間発表会、修論審査、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	4. チームワーク力：チームとして協働し積極的に目標の達成に寄与する能力	①チームとして協働し積極的に課題に取り組んだ経験はあるか ②自分の研究以外のプロジェクト等の推進に何らかの貢献をしたか	各種 OJP 科目、NGO 等プロジェクト、学会発表、TA 経験、課外活動等コーチ経験、地域スポーツ教室等指導経験など
	5. 国際性：国際社会に貢献する意識	①国際社会への貢献や国際的な活動に対する意識があるか ②国際的な情報収集や行動に必要な語学力を有するか	スポーツ国際開発論 I、スポーツ国際開発論 II、オリンピックムーブメント論、日本文化伝播論、社会開発のための公共政策、留学生との交流、国際会議発表など

	コンピテンス	評価の観点	対応する主な学修
知識・能力	6. 国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感	国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力、使命感を身につけているか。	社会開発のための公共政策、経済開発論など
	7. グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ	グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	スポーツ国際開発学課題演習、J SCセミナー、JSCプロジェクト、国外大学セミナー、国際カンファレンス・セミナー、スポーツ国際開発論 II、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論、異文化交流・コミュニケーションなど
	8. スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力	スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識と実践力の基盤となる知識を身につけているか。	スポーツ国際開発論 I、オリンピックムーブメント論、スポーツマネジメント論、スポーツ・文化・社会、ヘルスプロモーション論、上級コーチ教育論、研究方法論、スポーツ国際開発論 II、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論、セラピューティックレクリエーション概論、研究データ管理、分析法など
	9. 国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力	国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につけているか。	スポーツ国際開発論 II、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論など
学修成果の評価に関する方針	<p>学修成果の評価は、学位授与方針に基づくコンピテンスの修得状況を以下の段階毎の審査により確認・評価することで行う。</p> <p>第1段階（2年次秋学期始め）：中間発表会において、主指導・副指導教員を中心に共同専攻教員が修士論文の構成および進捗状況について質疑応答を通じて確認する。</p> <p>最終段階（2年次秋学期末）：主査および副査2名以上で構成される学位論文審査委員会において、学位論文に関する評価の基準に基づき審査を行い、教育会議において全教員で最終達成度審査を行う。</p>		

<p>学位論文に 関する評価 の基準</p>	<p>審査に当たっては、学位論文の提出を受け、主査および副査2名による査読とそれに続く口頭発表・質疑応答（主査副査に限らず公開で質問を受けつける）を行い、主査及び副査が100点満点による評価を行う。60点以上を合格とする。</p> <p><修士論文の審査基準></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究テーマの適切性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や学術的・社会的意義が適切に示されている。 イ 研究目的や課題が適切で、明確である。 ウ 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 2. 文献研究の適切性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 イ 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 3. 研究方法の妥当性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 イ 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 ウ 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 4. 論理の一貫性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究論文全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 イ 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。 5. 研究の独自性・独創性 <p>研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に独自性や独創性が認められる。</p> 6. 論文構成・体裁の適切性 <p>本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に従って、適切に修士論文が作成されている。</p> <p><特定課題レポート></p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 研究テーマの適切性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究テーマ設定の背景・問題、現場への有用性や社会的意義が適切に示されている。 イ 研究目的や課題が適切で、明確である。 ウ 研究内容がスポーツ国際開発学に寄与するものである。 2. 文献研究の適切性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究テーマに関連する先行研究を適切に整理・概観している。 イ 自らの研究に対して先行研究を適切に関連づけ、活用している。 3. 研究方法の妥当性 <ul style="list-style-type: none"> ア 研究目的等を達成するために妥当な研究方法が選択されている。 イ 選択した研究方法の妥当性やその方法を適切に示している。 ウ 研究を遂行するに当たり、適切な倫理的配慮が示されている。 4. 論理の一貫性 <ul style="list-style-type: none"> ア レポート全体を通して、論理展開に整合性、一貫性がある。 イ 研究目的や課題に対して、資料・データ等から論理的に明確な結論が述べられている。
---------------------------------------	---

<p>学位論文に関する評価の基準</p>	<p>5. 研究の実践性 研究テーマ、目的・課題設定、研究方法、結論等に現場における実践性が認められる。</p> <p>6. レポート構成・体裁の適切性 本専攻を構成する大学の学位論文作成要領等に準じて、適切にレポートが作成されている。</p>
-----------------------------	--

教育課程編成・実施の方針 / Curriculum Policy

体育学、国際開発学の2領域における専門的な知識、研究能力とともに、国際開発でリーダーシップを発揮するために必要な、多様性に対する理解など、汎用的知識・能力を養う教育・研究指導を行う。

<p>教育課程の編成方針</p>	<p>学位に相応しい専門的能力を身につけるため、以下の専門科目を実施している。また、関連する分野の基礎的素養や広い視野、汎用的知識・能力の涵養に資するよう、関連科目を設置している。加えて、研究群共通科目、学術院共通専門基盤科目、大学院共通科目からも2単位の履修を推奨することにより、汎用的知識・能力をさらに涵養する。</p> <p>講義科目（14単位以上履修）</p> <ul style="list-style-type: none"> - 基礎科目（スポーツ国際開発論Ⅰ、オリンピックムーブメント論、スポーツマネジメント論、スポーツ・文化・社会、ヘルスプロモーション論、上級コーチ教育論、比較体育科教育論、研究方法論など）において、獲得すべき能力の基盤となる知識を身につける。 - 応用科目（スポーツ国際開発論Ⅱ、経営マネジメント論、プロジェクトマネジメント論など）において、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力、スポーツ・体育・健康に関する実践力、そして国際貢献のためのコミュニケーション能力とマネジメント能力を身につける。 - 関連科目（社会開発のための公共政策、多文化共生論、経済開発論、社会開発論、研究データ管理・分析法など）において、国際情勢と政策及び地球規模課題に対する知識と分析力を身につける。 <p>演習科目（10～12単位履修）</p> <ul style="list-style-type: none"> - 学内科目（課題演習）では、スポーツを通じた開発と平和、スポーツを通じた教育・青少年育成、スポーツとジェンダー・人種・民族、健康と環境、アダプテッドスポーツ・高齢者の5領域を各自の研究テーマに合わせて選択し、獲得すべき能力についての専門的な知識とともに、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 - 学外科目（JSCセミナー、JSCプロジェクト、国外大学セミナー、国際カンファレンス・セミナーなど）では、グローバルな俯瞰力と実践現場で発揮できるリーダーシップ能力を身につける。 <p>実践科目（6～8単位履修）</p> <ul style="list-style-type: none"> - 国内OJP（4週間）と国外OJP（16週間）により、獲得すべき能力の実践現場での知識と実践力を身につける。
-------------------------	--

<p>教育課程の編成方針</p>	<p>キャリアパス形成</p> <p>本専攻は、筑波大学・鹿屋体育大学の両大学の特徴を活かし、かつ JSC との協働によって、講義・演習・実践とが橋渡しされ、キャリアパス形成に直結するような教育課程編成と実施がなされている。JSC が展開している事業に学生が参加する「JSC セミナー」「JSC プロジェクト」のほか、国内 OJP（4 週間）を実践する機関のひとつに JSC が位置づいており、国外 OJP（16 週間）実施の際にも JSC の情報やネットワークを活用している。国外 OJP は、学生のキャリアパス形成にとって重要であり、協定締結機関である国際協力機構（JICA）の長期ボランティア制度を利用できるほか、国外の NGO、IF、NF、大学等と連携を取って実施している。</p>
<p>学修の方法 特色的な教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 指導体制は主指導教員 1 名、副指導教員 2 名（副指導教員のうち 1 名は本籍大学以外の教員） - 1 年次において、各自の志望領域の課題演習を履修する。 - 1 年次後半から 2 年次にかけて、国外 On the Job Practice（16 週間）を実践。 - 2 年次において、課題研究を履修する。 - 2 年次において、中間発表会（10 月）、論文（または特定課題レポート）テーマ提出（11 月）、論文（または特定課題レポート）提出（1 月）、最終試験（1 月）を実施する。

入学受入れの方針 / Admission Policy

<p>求める人材</p>	<p>スポーツ・体育・健康に関する基礎的知識を持ち、スポーツに関わる指導経験など実務経験を有し、英語によるコミュニケーション能力及び国際情勢と政策に関する知識を基盤として、国際開発と平和構築に対する使命感、かつ目的達成志向の強い学生を求める。</p>
<p>入学選抜方針</p>	<ul style="list-style-type: none"> - 口述試験（合計 200 点）：スポーツ・体育・健康に関する基礎知識の評価、研究計画のプレゼンテーション、質疑応答（海外在住の受験者に対しては、オンラインで実施） - 英語（TOEIC または TOEFL または IELTS を 100 点満点に換算）

学修支援体制 / Learning Support Framework

<p>学修支援</p>	<p>修士論文のための研究に向けて必要な研究方法論や研究データ管理・分析法の授業を開講している。また、英語での論文作成に必要なライティング能力の養成および英語でのプレゼンテーション能力の養成のため、各課題演習を通じてライティング指導を行っている。さらに TA や課外活動での指導経験を通じて、教育・指導技術を高める機会を提供し、必要に応じて補講や個別指導を行うことで、学生主体の学修や時間管理を支える。</p>
<p>学生同士の交流機会</p>	<p>ピア効果を踏まえた学修意欲と研究の質を高めるために、課題演習や講座授業におけるグループワークを通じた相互学習や、学外演習での協働経験を通じた学修機会を提供する。また、同じく英語による教育研究を進めている TIAS2.0 との交流、さらに履修科目や研究によって形成された国際的なネットワークを活用する。</p>

<p>教員との交流機会</p>	<p>鹿屋体育大学との共同専攻である強みを活かし、所属校の主指導教員 1 名および所属大学外の教員を含む副指導教員 2 名による指導により、多様な意見を求められる体制を作っている。また、国際インターンシップ中の相談を含む対面およびオンラインでの個別面談や研究指導を通じて双方向的交流を行うと共に、中間報告会後の懇談会などを通じて、研究のみならず、学生生活の課題を共有できる機会を継続的に提供する。さらに、教員との共同研究や国内外インターンシップおよび学外演習において教員と学生が協働する機会を構築している。</p>
------------------------	---

教育の質の保証と改善の方策 / Approaches to Assuring and Enhancing Educational Quality

教育の質の保証と継続的改善を図るために、授業評価アンケートや修士論文審査結果をもとに教育課程委員会で指導方法を検討し、必要に応じて改善している。また、JSC や協定締結機関との協議を通じて、実践科目の教育内容を検証し、国際的な実務ニーズに即して改善している。さらに、学修プログラムおよび指導成果に関する研究を行い国際誌に投稿することで、教育の国際的妥当性を検証している。加えて、教員会議において定期的なカリキュラム点検を行い、ディプロマ・ポリシー及びカリキュラム・ポリシーとの整合性を確認し、必要に応じて改善している。以上、達成度評価表や授業評価などによって、学生の学修成果に関する評価を行い、教育課程の妥当性や指導の適切性を検証している。